

畑 正憲



ムツゴロウの
野性教育

ムツゴロウの野性教育

畑
正憲

ムツゴロウの野性教育

著 者 畑 正憲

発行者 櫻井義晃

発行所 廣済堂出版

東京都中央区銀座3-7-6 〒104

電話 03(561)2061代

振替 東京8 164137

印刷所 廣済堂印刷株式会社

定価は、カバーに明示してあります。

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

0030-001840-2230

©1979 Masanori Hata

序にかえて

会社に勤めていた頃、上司であった知人を訪問した。彼は東京の高級住宅街、田園調布のはずれに住んでいる。

「久しぶりだな。ま、ゆっくりして行ってくれよ」

と迎えられたが、私はまず家が立派なものにはびっくりした。まるで大富豪の家みたいに応接間が広い。

「立派なお宅ですね」

私がキョロキョロ見回していると、

「なあと借金コンクリートで建てちゃってね、退職金まで担保に入れたから、これで一生、今の会社から足が抜けなくなつたよ」

知人はそう言つて高笑いをした。ローンで建てたので、月々の返済が大変なのだそうだ。用事はすぐ終つたのだが、

「久しぶりにきたのだ。子供に会つてやつてくれ」

と、私はひきとめられた。

彼は中学一年生の男の子を頭に、小学校五年生の娘、四年生の息子と、三人の子供を持っている。娘一人しか持てなかった私に比べて、まことにうらやましい理想的な状態である。子供は多い方がいい。一人だけというのは、寂しくっていけない。

そのうち、小学生の二人が帰ってきた。挨拶に出てきて、私を見るとバツと顔を輝やかせた。多分テレビか何かで、動物と暮す変てこな人物、つまり私のことを見て知っているのだろう。早速、質問をした。

「今、動物が何匹いるの」

「さあて、二百ぐらいかな」

「ふうん」

二人はまだ質問したそうだったが、時計を見て急にそわそわし始め、おやつを食べる間もなく、どこかに行ってしまった。

長女の方はピアノを習いに、次男の方は絵を習いに行ったのだそうだ。

やがて奥さんが、

「まあ、いらっしゃい」

と、あたふたと現れた。知人の説明では、ローン返済のため、近くの病院にパートで勤めて

いるのだそうだ。なんでも、健康保険の事務をとる講習を受けたので、アルバイトとしては給料が いいのだそうだ。

知人は言う。

「子供が大きくなってくると、一つずつ部屋を与えたいだろう。それで家を建てたのだが、ローンの返済に加えて教育費がかさんで、どうもね、安月給じゃあね、女房に働いて貰わないとやってゆけないんだよ」

中学生の長男の帰りが遅いのにびっくりした。学校でクラブ活動でもしているのかと訊くと、そうではないと言う。途中、天才教育をする塾に寄ってくるのだそうだ。知人は自慢した。「こいつはもう微分積分を習ってんだよ。微分積分と言えば、おれたち、高校の二年生の時、教わったものだが」

その長男は、色が白く、指など、さわれば折れそうなくらい白かった。無口で、神経質そうでもあった。思慮深い哲学者という感じで、子供らしいはつらつとしたところがなかった。

私はため息をついて言った。

「中学の一年生で、昔の高等数学が出来るのはすごいよ。数学者になるのもいいなあ。俗世間とはなれて暮すのもまたいいものだよ」

すると知人は、とんでもないと手を振り、こいつにはしっかり勉強して貰い、一流の大学を

卒業し、大蔵省か何か、トップクラスの役所に入って貰わねば、と将来の生活設計を披露した。どんなにしっかりしているようでも民間企業は危なっかしくて、その点、国のトップに坐っていれば、最も安全だからとも説明してくれた。

奥さんもその意見に心から同意している風だった。

子供たちは夕食をはさんで一時間だけ顔を合せていた。

寸刻を惜しむかのようにテレビを覗いていた。テレビでは、若者向けの、くだけた歌番組が放送された。

知人が小声で、

「観てないと、学校で馬鹿にされるんだそうだよ。これと、深夜放送、ね」

そう言えば子供たちの顔は、真剣だった。まるで勉強をしているみたいだった。

夕食後、さらに私はびっくりした。

下の二人の子が、近くの塾へ行ったのである。そして長男のために、家庭教師がやってきた。たまりかねて私は言った。

「すごいんですねえ。ずっとこの調子なんですか」

「うん？」

「塾だとか、家庭教師だとか、これじゃ、子供が遊ぶ閑^{ひま}がないじゃありませんか」

「それはね」

知人は苦笑し、自分もよくないと思っているんだが、仕方がないんでねと言ひ、

「ここは東京なんだから」

「ふうん」

「競争が烈しくつて、皆、大なり小なりこうやつてゐるんだよ。子供たちも、そうしたいと言ひしね」

「おやおや」

「昔と違うんだ。試験でも平均点がずっと上つてきていて、二点か三点の違いで、落つこちたり合格したりするようになってんだよ。昔のように、秀才かボンクラかというんじゃなくて、全員がレベルアップして並んじやつてゐるわけだよ。極端なことを言えば、当落すれすれの所に、何百人もひしめいてゐるわけさ。だから、親として、出来ることはやつてやらなければね」

「そういうものですかねえ？」

「おれも君と同じように、子供は遊びつつ大きくなつた方がいいという意見を持つてはゐるんだが、世の中がこうなつちまつてゐるんだから、ま、仕方がないんだよ。流行に合せて幅の広いネクタイをしめるようなものだな」

奥さんも同じ意見なのだろう、盛んに頷いていた。頷きつつ、ときどき横を向き、軽く口を

押えている。あくびだった。目も充血していて、疲れ果てているようだった。

私は長居は無用と、そうそうに知人の家を辞した。

果してこれでいいものだろうか。子供に勉強部屋を一つずつ与え、家庭教師をつけたり塾に通わせたりするために、肝腎の両親が疲れはてて、家庭が空白になってしまっている。これでもいいものとは、どうしても思えない。

一家のだんらんを含めた家庭教育は、学校教育と同じくらい大切である。両者が助け合つてこそ、子供は立派に育つていく。部屋数はすくなくとも、たとえ借家であっても、明るく、暖かい家庭があつた方がずっといい。

それに――だいたいそもそも、知識を吸収するためにだけ生活を振り向けてしまう態度が氣に喰わない。本来子供たちは、学校で充分に知識を身につける作業をしているのである。その上更に緊張を強いるのは、一種の犯罪的な行爲と言える。

たとえば野の草は、さまざまな栄養を吸収して丈夫に育つていく。風や雨や太陽がまたそれなりの恵みを与え、草は美しい姿になつていく。

いわゆる「勉強」は、人にとつて一つの栄養でしかない。人は野の草よりもっと複雑な生きものだから、栄養とすべきものはもっとたくさんある。兄弟が同じ部屋で、体をこすり合せて暮すのも、実は勉強よりもっと大切な栄養なのである。そういったものをすべて無視して、

“勉強がよく出来る”子供にするため、生活を単純化し、小さい頃からある一つの緊張を強いるのは、結果としては子供をスポイルすることにつながっていく。

皮肉を言うなら、小学生の頃から、勉強、勉強と追いまわされた子は、伸びがとまってしまい、机についてる時間は長いけれど、あまり出来がよくない場合が実に多い。むしろ、たくましく遊んだ子供の方が、後で爆発的に伸びるのである。

親たちのものの考え方が、小さくなり、あべこべになっている気がしてならないのだ。私は、社会の風潮や親の手によって、子供にとって最も大切なものが失われている気がしてならぬので、これからしばらく、わが教育論を聞いていただきたいと思う。

もくじ

鯨を見て泣く中学生・13

肉声の喪失・23

価値の倒錯・45

人間の底力・66

分業家族になるなかれ・86



良き旅を・ 106

天才教育の周辺・ 128

まず人間として・ 148

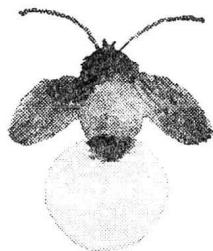
地を這って生きるために・ 168

混沌の中から・ 188

三つ子の魂・ 208

よい成績を・ 229

一度は光って・ 250



本文イラスト＊村上豊
扉・目次レイアウト＊田島廉仁

ムツゴロウの野性教育

畑正憲

鯨を見て泣く中学生

インド洋に浮かぶ小さな島で、私は自分と同年配のドイツ人と会い、談たまたま動物に及ぶと、彼もまた狂的な動物好きだったので、たちまち意気投合してしまった。島に滞在していた二週間、私たちはずっと夕食のテーブルを共にした。

そのドイツ人は、中学校の三年生だという娘さんを連れていた。

トップレスでのし歩く自由な雰囲気島の島だから、体の発育はよく分る。胸がちよっぴりふくらみ始めた年齢であり、わずらわしいニキビがぼつんぼつんと生じていた。

「学校は休みでしたかなあ」

私が訊くと、ドイツ人が答えた。

「休みじゃありません。休暇を貰ったのです。娘は二カ月、ここで暮します」

「それはいい。私にも娘がいて、ハイスクールに通っています。私は連れて歩きたいので、よく、一緒にこないかと誘うのですが、学校があるもん、と断わられてしまうのです」



「学校は休みをくれませんか」

「え？」

「ドイツでは、たとえば旅行に連れて出るとき、旅の目的を話せば、それが子供のためになるものなら、ちゃんと休暇をくれるのですよ。もちろん出席扱いです」

「なるほど。うらやましいな」

「アフリカに行ったり、インド洋の島にきたりするのは、とてもいい勉強です。学校の生徒すべてに体験させたいが、経済的な事情でそうもいきません。ならば、出来る子が行くがいい、そういう態度なんです」

「ドイツ人らしいな。合理的だ。勉強というものの幅を広く考えてる。二カ月程度なら、休んだって、たいしたことはありません。遅れは、一週間で追いついてしまう」

「第一、得るものが大きい」

「まったくです。日本にはそのようなシステムがないので、私は娘を一年間休ませ、無人島に連れて行って暮しました」

「おやおや、スケールの大きな話だな。日本人らしくない、おっと、失礼」

「どういたしまして。これは私が、子供の頃、中国の奥地で生活し、素晴らしい宝物を得ていたからです」